
スタートライン

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スタートライン

【Nコード】

N6673M

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

私は元教師。子どもは拓一人。

扇風機の前でひたすらあーと声を出し、震えるのを楽しんでいる息子。

可愛いけどもう可愛いと許せる年齢ではない。

「いつまでやってるの。拓」

「疲れるまで」

息子は六年生なのに、一人で今日も遊ぶ。

「パソコンのゲームはしないの」

「うん」

「どうして」

「だって、風来ないもん」

「それはそうね」

息子は人より遅れてると言われてきた。小学校の入学式で、はいと元気な返事をした時は、これでうまくいくような気がしていた。

だが、同級生は計算も漢字も次々とよくできるようになったが、息子はそうはいかなかった。ブロックを使つての足し算は、ひたすら五のまとまりが分からず、七は五と二という構成には行きつくことがなかった。

それでも、一年生の間はよかった。やがて、二年生になると計算は二位数と二位数の加減になり、九九が加わった。しかも、漢字は遠足という難しい言葉まで出るようになった。やっとひらがなと漢数字に、山や川などが読めるだけなのに、書くということは大変だった。

宿題プリントを済ませるのに、親子で泣きながらやらせることに矛盾を感じた。

「ねえ、あなた、拓に普通学級は無理ではないかしら」

「何言ってるんだよ。じゃ、養護学級に入れるって言うのか。そん

なことできない！」

「でも、宿題だけで一日が終わるのよ。拓も私も大変だわ」

「みんなそうだよ。初めだけだ。やるしかないだろ」

「あなたは仕事に行くからいいけど、私は仕事に戻ることもできずにずーっと、息子を泣かせながら宿題をさせる気」

「さあ、拓。御飯だ」

面倒な話になると、夫は息子を膝に抱き食事を始める。私だってそっちがいい。私が仕事に行き、貴方が子どもを見る方がいいわよ。拓はニコニコ笑いながら、膝の上で食事しようとする。

「やめて、行儀悪いわ」

「いいじゃないか。勉強で疲れたんだ」

「拓、椅子に座りなさい」

「やだ」

「拓、お母さんの言うことがきけないの」

ヒステリックになる自分に、息子は泣き始め、私は耳をふさいで部屋を出た。

「もう嫌、もうたくさん」

私は教師だった。でも、この子の発達が遅いと保育園でも言われ、就学時健診ではチェックが入った。仕事はやめて、この子にかかりきりになった。

私の頭の中では、息子はクラスで一番できる子どもようになるかと信じていた。私も夫も有名な大学と仕事も堅実にこなしていた。夫は県庁に勤めていた。

二人の結婚は校長の口利きだった。校長の親戚の中に県庁勤めの夫がいたのだ。私も彼の手柄や学歴、将来のことを考えて結婚した。何もかも順風満帆だった。出産した時も色白で可愛い拓は、祖父母からも愛された。初孫だった彼の両親は、鯉のぼり、五月人形など、数十万もするような立派な名のあるものを送って来た。

でも、田舎へ連れて帰ると、弟の孫の方がはるかに要領よく、本読みも遊びも率先してできた。私は考えまいとしていたが、息子の

発達の遅れを感じ取った。教育センター、教育研究所といろいろ連れて行き、子どもの発達を見る病院にも足を運んだ。

結局、息子の知能は境界線上で、普通学級でぎりぎりということだった。だが、それは一年生だけで、その後は教室にいるだけで息子のためにはならない気がしてきた。

自分が教員だった時もこうい子どもはいつもいた。性格がよければみんなに愛される。だが、それは愛されるとは断言できずに、愛されることもあるという程度だった。小学校や地域によっては、疎外の対象にもなった。

低学年では愛されても、高学年になると、速度についていけない子どもは鬱陶しがられていく。いつの間にか息子の遊ぼうという問いかけに、みんなが忙しいと言うようになった。

「拓、お母さんと遊ぼう」

「拓、今日は公園に行こう」

「拓、ビデオを見よう」

「拓、テレビでもつけなさい」

私の行動もどんどん縮小していった。率先して遊んでいたのに、そのうちにはテレビに子守りをさせる自分がいた。

ふと、そんなある日、教え子の春奈ちゃんから葉書が来た。この子は良くできる優しい子で、クラスの人気者だった。その子が結婚したという知らせは五年前の年賀状でわかった。今度は子どもが保育園に入ると言う。写真はダウン症の息子と書いてあった。

春奈ママと映るその子は、ニコニコ笑ってスコップを持っていた。二人で海に行った時の写真だと書いてあった。

「先生、私、やっと写真を送ることができるようになりました。息子です。先月離婚しました。いろいろあったけど、この子にとって恥ずかしい母親にならないと決めました。先生、人はみんな仲間ですよね。この子にも早く仲間ができるといいな」

読みながら、泣けてきた。四〇代後半の元教師が、教え子に教えられている。人の命の尊さと、人としての権利をみな与えられている

のだと。

この子の十二年、私は何をしてきたのだろう。普通学級で伸びる子どももいれば、支援学級で自分に合った教育で伸びて行く子供もいる。一人になった時に生活できるのは、難しい体積や面積や歴史ではない。

このお金でどこまで生活できて、自分は何ができるのか。テレビで子守りをさせても、拓は一人で電車に乗れない、食事を作れない。決心した。

拓に合う教育はどういうもの？

家柄とか、学歴とか、この子の生きる力にプラスになる？

「拓、今から養護学校の見学に行こう」

「ルカちゃんがいくところ？」

「そうよ」

そうだった。ルカちゃんは拓の隣の支援学級で過ごし、中学からは養護学校へ入学するのだ。夫がなんとと言っても、拓のためになることを考えよう。拓は恥ずかしい子供ではない。私が生んだ立派な男の子よ。現に今までどれほどこの子の子育てで楽しいことを経験させてもらったか、忘れるところだった。

扇風機を消すと、拓は怒っていたが、私が笑いながら化粧していると、

「お母さん、笑ってるね。いいことあったの」

そう話しかけてくる。

「うん、拓が傍にいたらお母さんはとっても幸せよ。拓、来てごらん」

拓を抱き寄せ、久しぶりに膝に乗せた。重い。

「お母さん、こんなこといけないことでしょ」

「ううん、いけない」

甘えることを我慢してきた息子。

鼻をしゅんしゅん言わせてると、拓は振り向いてほっぺたにキスをしてくれた。

何をしてきたの、私。息子に慰められてるのね、優しい子。

「拓、私の大好きな息子」

いつの間にか帰っていた夫は、いつからそこにいたのだろう。

私の泣き笑いの顔を見ながら、拓と私を思い切り抱きしめてこう言った。

「僕の大事な宝物。拓の進学先真剣に考えような」

その夜、春奈ちゃんに手紙を書いた。今までの出来事を全て書いた。最後にこう締めくくった。

「あなたのような素敵なお母さんになれるよう、今日からがんばります。落ちこぼれていたお母さんより」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6673m/>

スタートライン

2010年10月8日14時11分発行